

国沢の田の神様（上氏家町）



上氏家の国沢というところに、田の神様の石造りの御堂があります。この御堂は、いま新しく建てかえられて、明るい陽ざしの中に白く輝くように立っていますが、昔このあたりは昼ももうす暗い森で、杉の木立ちが空高くそびえていたそうです。その昔、となり村の余田というところのお百姓

が、田んぼの中から一つの変わった石ころをみつけたので、家へ持って帰ることにしました。その石

ころは、三角形をしていて、重さは女でも持てるぐらいのものでしたが、だんだん家に近づくにつれて次第に重くなり、とうとう持ち運びもむずかしいくらいになりました。

それで、お百姓は何となくその石を粗末にはできない気がしたので、庭先をきれいに片付け、そこにその石を丁寧に立てました。

ところが夜中に神様から夢のお告げがあり、「その石ころは、上氏家の田んぼの守り神じゃ、早う上氏家へもどしてくれ。」

と言われたので、跳び上がらばかりにびっくりしました。お百姓は

「かんにんしておくんねえ、今すぐもどしえんす」と言って、夜が明けはじめると、その石ころをかかえて上氏家へとんで来ました。

上氏家でも村中大さわぎになりました。

「粗末にして罰が当たったら大変じゃ、水がかれて米が取れんようになったらどうせんしょう。」

この前の飢きんは田の神様をほおつておいたからや。」

とみんな思い思いに心配を並べたてました。そして、田の神様の化身であるこの石ころを供養するために、立派な御堂を建ててまつることになりました。

国沢の森の杉の木を切り倒して、少し広い場所を作り、そこに石造りの御堂を建てて田の神様をまつりました。そして、村中から餅米を集めて、餅つきをすることになりました。どの家も貧しかったので、集まった餅米は餅まきをするのには足りないくらいでした。ところが一晩明けると、餅米は倍にふえていました。

「不思議なのう、不思議なのう。」

とみんなで言い合いながら、餅米を蒸し、餅をつきました。更に不思議なことに、餅をついたら倍にふえて、棧敷の上からまこつとしたらまたまた倍にふえ、盛大な餅まきになったということです。

それから、毎年の十二月五日には、田の神様に生鯛とぼた餅と煮物を供えお祭りをしました。煮物には、太いわらの切つたもの二本を箸の代わりにさし込みました。みんなは当番の家に集まって、田の神様の土地からとれたもでの御馳走をつくり、豊作を感謝しながら賑やかに宴会をやりました。みんなで豊作のお祝いをするこの習わしは今にいたるもなお続いています。

